

市長が行く

茂原市長 田中 豊彦

No.11

官と民に関する一考察

徳川家康の言葉に、「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し」というのがあります。世の中は堪忍が第一ということと理解して時々自分に言い聞かせておりますが、茂原市の財政の立て直しについても、同じように感じられてなりません。

先日当選した千葉市の若き新市長が翌日の記者会見で、「行政で今までやつてきた事業を一つずつ見直して、民間に任せられる事業は民間に任せ、無駄なコストは使わないようにする」と言つていました。今「官から民へ」というひとつ動きがあります。先月この欄で取り上げた「ひめはるの里」もそのひとつになるでしょう。

なぜ、官から民なのか? 民間では企業同士の競争の中で、コストを削り利益を上げることがます大きな目標になります。反面、行政は住民のニーズに応えるべくサービスの向上に努めることを第一の目標としています。行政には民間と比較して競争意識が薄く、コストに対する感覚よりも、いかに住民サービスに応えたらいいかに目が向けられてしまうことが多いよう思います。一概にそれが悪いことと言えないのですが、そのため、無駄な出費がかさんで

しまうのです。

例を挙げると、広域で行つている温水プールは、多くの方たちが利用されていることは分るのでですが、年間の使用料収入が5千万円くらいであるのに対し、運営費用は1億円以上もかかっています。これは民間では考えられないことであり、普通の会社ならつぶれてしまいますが、行政だから成り立つていることと言えるでしょう。これはほんの一例ですが、このようないつの積み重ねが、財政をここまで悪化させてきた一因と言えます。今後、私たちは限られた予算の中で、どうしたらより良い住民サービスが出来るのか、知恵を絞り、努力していくなくてはなりません。「官から民へ」これはひとつキーワードです。それがベストの選択とは言えませんが、今の経済状況ではやむを得ないことを考えます。

それと同時に、これからは、何が本当に必要なサービスなのかも的確に判断することがとても大切になつてくると思います。慈愛の心をもつて、しかし不必要的サービスは、どんなに誇られようと、カットしていくという強い決断力と勇気を持たなければ思つております。

